生成 AI 時代の美的経験――味覚から文脈依存性と多感覚性を考える

Jean Lin（大阪公立大学）

本発表では、これまで作品の造形的な生成技術を中心に論じられがちであった生成 AI が、美的経験の多感覚的かつ文脈依存的な性質にどのように関与しうるのかを検討する。近年、生成 AI が視覚や聴覚を中心とした作品の創出に用いられ、著者性・創造性・美的判断といった美学における重要な概念が揺るがされているとして、それらを再考する議論が活発化している（Elgammal 2019、Manovich 2020、McCormack 2023）。しかし、こうした議論では造形的な生成技術に重点が置かれる傾向が強く、美的経験が単一の感覚や造形に還元されるものではなく、文化的背景や複数感覚の相互作用を含む体験として成立する（Korsmeyer 1999、Saito 2007、Howes 2005）という点が十分に考慮されていない。

本発表では、味覚というこの多感覚的かつ文脈依存的な性質を最も顕著に備えた感覚を手がかりに、その美的価値を生成 AI の進展を背景に再考することを通じ、次の二つの目的を達成することを目指す。

第一に、作品の文脈的・多感覚的側面に生成 AI がどのように関与しうるのかを明らかにし、その現状と課題を把握する。その過程で、味覚の美的経験における文化相対性や多感覚性に関する理論的枠組みを整理する。この観点から、イノベーティブな現代料理や味覚に訴える現代アートの実践例を分析し、AI が美的経験の多感覚的かつ文化的側面にどのように関わり得るのかを検討する。

第二に、先に論じた多感覚的・文化的依存性を持つ美的経験が、データや技術の偏りによって現状の AI では十分に扱われていないことを指摘する。そのため、AI が生成するのはしばしば均質化され、かつバイアスを含んだ表象となっている（Noble 2018、Benjamin 2019、Crawford 2021）。これはマジョリティとマイノリティ、西洋と非西洋、高級感覚と低級感覚といった既存の序列を強化し、その上位を再び中心に据える傾向を生み出している。このような現状を踏まえ、最後に文化や感覚の多様性を AI がいかに取り入れていけるかという展望を提示する。

本発表は、味覚を入り口として、生成 AI と美的経験の議論において十分に検討されてこなかった多感覚的かつ文脈依存的な視点を示すことで、AI が美的経験をどう変容させるのかを再考する基盤を提示する。